

第4回京都府総合教育会議議事録

- 1 日 時 平成28年3月29日（火）午前10時から10時45分まで
- 2 場 所 京都府庁3号館3階教育委員室
- 3 出席者 山田 知事、小田垣 教育長、畑 教育委員（教育長職務代理者）、
冷泉 教育委員、平塚 教育委員、上原 教育委員、安藤 教育委員

4 議事内容

(1) 知事あいさつ

(森下文化スポーツ部長)

ただ今から平成27年度第4回京都府総合教育会議を開催いたします。
まず始めに、山田知事から御挨拶をお願い申し上げます。

(山田知事)

今年度はこれで最後ですので、しっかりと大綱をまとめましょう。よろしくお願ひします。

(2) 京都府の教育等の振興に関する大綱の策定について

(森下文化スポーツ部長)

それでは、さっそく本日の議事に入らせていただきます。
前回の第3回会議で協議いただいた「京都府教育等の振興に関する大綱」の素案に加筆・修正したものを、本日大綱（案）として提示をさせていただきます。本日は、これについて御協議を賜りたいと考えておりますので、よろしくお願い申し上げます。
まず始めに、事務局から大綱（案）について御説明申し上げます。

(中越文教課長)

お手元の「京都府の教育等の振興に関する大綱（案）」を御覧ください。前回からの修正点を中心に御説明します。

まず、前文で、子どもの貧困、児童虐待、いじめ、薬物乱用など、子どもたちを取り巻く環境が厳しさを増す中、子どもたちが困難に直面しても、それを乗り越えていけるよう、家庭、地域、学校、関係機関などが連携して子どもたちをしっかりと受けとめ、支えていく環境をオール京都体制で整えていくことを記しています。

次に、基本方針の1では、子どもたちが「変化の激しい社会をたくましく生き抜くことができる」よう「7つの育み」として整理しました。

前回との変更点は、まず(1)の「たくましく社会を生き抜く力の育み」として、自ら

が主張すべきことを主張でき、学校や家庭、それから友人など周りの人に相談しながら解決していけるよう加筆いたしました。

また、(5)の「京都の文化を身に付け、次代へ引き継ぐ力の育み」は、御意見を踏まえ、今回新たに加筆しました。

基本方針の2では、子どもたちが「安心して学ぶことができる環境を地域社会全体で整え」ることを加筆し、「5つの取組」として整理しました。(2)の「いじめ、少年非行、不登校などへの取組」には虐待など家庭内で起こる問題についても加筆しています。

基本方針の3では、「次世代を担う子どもたちの未来を、オール京都体制で支え、拓きます」と書かさせていただき、家庭や地域社会、市町村、私学、関係団体や専門機関とともに、オール京都体制で子どもたちを支えることを記しています。

基本方針の4では、知事部局と教育委員会が一体となって、文化、スポーツや生涯学習に総合的に取り組むこととし、特に(1)では、京都の文化、文化財の意義などについても記しています。

(森下文化スポーツ部長)

説明は以上のとおりです。何か御意見、御質問がございましたら、よろしくお願ひします。

(畑委員)

いろいろバランス良く調整していただいて、読みやすくなりましたし、前回知事がおっしゃった「思いを発信する勢い」も考慮してもらえたと思います。先ほど少しみんなで意見交換をしながら読ませていただきました。まだ行政の皆さんがお使いになる専門用語的なものがちらほら見られるので、府民の視点で見たときに、ずっと読める言葉に置きかえる必要があるところが、文中に二、三あります。それは事務的に申し上げますので、最終調整をお願いしたいなと思っています。

ネグレクトやプラットフォームなど、私たちは行政にこうやって提示してもらおうと理解できるようになったつもりなのですが、一般社会ではわかりにくいかと思います。

(森下文化スポーツ部長)

その点は、また語彙をわかりやすく工夫して協議させていただきます。

(冷泉委員)

細かい話で恐縮ですが、基本方針3の「次世代を担う子どもたちの未来を、オール京都体制で支え、拓きます」の「拓く」は読むのがちょっと難しいのではないですかね。

(森下文化スポーツ部長)

確かにこの漢字はすっと入らないかもしれません。どうでしょうか。教育長、何か御意見は。

(小田垣教育長)

細かいことは、またあとで調整します。

基本方針3で「オール京都体制」という全体の方向性が示されているのですが、基本方針2で、少年非行や虐待への取組が示されています。これらの取組として今、特に重視しているのが、例えば、児童相談所との早い時期からの連携や学警連携なのですが、基本方針3で初めて登場します。学校だけで動き過ぎるとなかなかうまくいかないの、あえてここは児童相談所とか学警連携を基本方針2にも入れた方がいいのではないかと思います。

(森下文化スポーツ部長)

最初はそれぞれ書いていたのですが、逆に3番でくくった方がいいかなということで削っています。そういう面ではわかりやすきを出すために若干そこで追記してということでもた調整します。

(上原委員)

薬物は一番喫緊の問題として挙がってきていて、特に低年齢化してきているので、そこは十分配慮があればと思います。

(平塚委員)

薬物については2の(2)と(3)に書かれていますね。(2)の「家庭内で起きる問題や薬物乱用などの非行行為の防止・根絶へ向けて」ですが、薬物乱用はやはり家庭の問題も含めた方がいいかと。地域社会全体で薬物乱用を防ぐ必要がありますが、前回冷泉委員もおっしゃっていたように、薬物乱用もいじめも少年非行も全て、やはり家庭にも問題があると思うので、そのあたりもうまく言葉を考えられて。

(安藤委員)

教育長と同じなのですが、この2番と3番の順番がどうかと思っています。

(森下文化スポーツ部長)

一体的に取り組むということは先に。

(森下文化スポーツ部長)

知事は何かございますか。

(山田知事)

最後はちょっと細かいことまで含めて、ざっと言っておきます。

教育長がおっしゃったように、やはり今回一番大切なのは、子どもたちが安心して学べる環境をオール京都体制、京都全体でチームをつくって整えていくのだという発想なので、それを前段に入れておいたらどうでしょうか。

それから、1の(1)で「育み」を書いていて、最後は全部コミュニケーション能力に

集約しているのですが、そうなのかなと。やはり、相手が何を求めているのか理解する力、自らしっかりとした考えに基づき主張する力、コミュニケーション能力、この3つぐらいに分けて書かないと、全部コミュニケーション能力でまとめてしまうのは、ちょっと変な感じがします。コミュニケーション能力以上に大切なものがあるのではないですか。コミュニケーションというのは相手との意思疎通でしょう。その前に「相手のことを理解する力」とか、「自分のことをきちんと言える力」があって、その上で「キャッチボールができる力」という形にした方がきれいだと思います。

(森下文化スポーツ部長)

わかりました。たくましさを培う表現を工夫して。

(山田知事)

(2)は、「就職、結婚や出産・子育て」だと思うのですけれども。

(森下文化スポーツ部長)

わかりました。

(山田知事)

それから、(4)の規範意識が(1)の「たくましく生き抜く力」と少しダブってしまっているので、規範意識のところでは、もう少しきちんと規範意識と人権問題に集中して、余分なセンテンスは要らないのではないかなという気がします。

(森下文化スポーツ部長)

わかりました。これは絞り込みをします。

(山田知事)

あと、(6)の「世界の多様な価値観の違いを受け入れる心」はよくわからない。「多様な価値観の違いを理解する」ということでしょうか。

(7)の書き方はちょっと気を付けた方がいいと思いますよ。たくましく生きる力を身に付けるために体力をつけるのではないと思うのです。自分の置かれている状況を踏まえながらきちんと体力をつけていくということであって、それで心も健やかになるみたいな書き方は、表現としてまずいのではないかと思います。

(森下文化スポーツ部長)

わかりました。そこはもう少し。

(山田知事)

それから、2の(1)の「子どもの貧困への取組」は、私は就学前から就職に至るまでのライフステージだと思いますね。なぜ小中高で切るのは。いかにも教育委員会的な発想になってしまっています。

それと、(2)のいじめ、少年非行のところは、「担当教諭が抱え込まず、学校全体で情報を共有する」ではなく、いじめについては、もっと組織的に対応するのではなかったですか。

(森下文化スポーツ部長)
チーム体制とも言われました。

(山田知事)
情報共有だけではないでしょう。

(森下文化スポーツ部長)
はい、わかりました。

(山田知事)
そこは少し急に後退した発想になっているのだと思います。
それから(4)は主語がよくわかりません。「保護者や地域住民による学校運営への参画や見守り活動」はわかるのですが、「地域の活性化に貢献する取組」とは、保護者や地域住民が地域の活性化に貢献する取組をするということですか。それは制度ではないですか。

(橋本教育次長)
これは学校側ですね。

(山田知事)
学校側でしょう。主語がなくなってしまっているのですよ。

(森下文化スポーツ部長)
「学校が」という主語にして。

(山田知事)
それから、3はネットワークだけでなく、「チーム」のことをきちんと書くべきだと思います。ネットワークというのは情報を共有する組織でしょう。それに対して、「チーム」はそれプラス行動。今は教育も“行動する教育”を進めていますよね。

(小田垣教育長)
アクティブラーニングですね。

(山田知事)
アクティブラーニングは入れないのですか。

(小田垣教育長)

教育振興プランには入れていますけれど。

(山田知事)

だから、最初に言った「確かな力を育む」に、アクティブラーニング的な発想も少し入れた方がいいのではないかなと思います。

(橋本教育次長)

(3)の「学力の育み」にその部分が入っているので、ここをもう少しきっちり書けば。

(山田知事)

それから、4の(1)はちょっと違っています。文化財を体験し、継承していく。やはり維持・保存もあるのですよ。新たな文化財を見出して、みんなで守っていく。その「守っていく」という部分が少し弱い。「生み出していく」だけになってしまっています。守って、見つけ出して、そして新たな力へ、となるので、守る部分が少し弱いのではないかなと感じます。

それから、(2)の「誰もが親しめるスポーツの振興」に地域の視点がないのが気になります。地域総合スポーツクラブをつくって地域ごとでもやっていこうではないかという話をしているのに、スポーツ振興の中に「地域」という言葉が全くなくなってしまっているので、教育委員会としても変ではないかなと思います。

それから、(3)は「生涯学習の基盤づくりを進める」だけなのかなと。基盤づくりとともに、やはりそれをしっかりと動かしていかなければいけないのではないかなと思いますので、そのところをもう少し書き足してほしい。

一応ちらっと見て気が付いた点だけ申し上げましたので、よろしくお願いします。

(森下文化スポーツ部長)

今いろいろと言われました意見を、この体系の中にうまく落とし込みや整理をして、わかりやすくまとめていきたいと思います。

(山田知事)

具体的に言ったつもりだけれども、だめならだめ、あるいは「ここはこういうことです」と言っただけであればありがたいのだけど。

(森下文化スポーツ部長)

大丈夫です。理解していますので。

(山田知事)

もう最後の回なので非常に具体的に言わせていただいたのですけれども。

(森下文化スポーツ部長)
ありがとうございます。

(山田知事)
あとは教育委員会も、多分文言についてみんなそれぞれあると思いますので、また見ていただいて、御意見を聞いていただいて。

(森下文化スポーツ部長)
何か今の御意見について、御意見よろしいですか。

(山田知事)
少し知事の言うことはおかしいのではないかという意見がありましたら。私も教育長のおっしゃっているチーム制をきちんとやっていくことは一番大切だと思いますので、京都府と教育委員会がチームを組んでやっていくということはきちんと書いてもらいたい。その中でまず子どもをどのように育むか、そのためにどういう環境をつくるのか。そして、そのために我々はさらに連携を高めなければいけませんねと。それで、最後に教育の範囲は広いですよという形で、きれいにまとまっているとは思いますが。

(森下文化スポーツ部長)
御意見をいただき、かなり具体的な内容も伺いましたので、事務局の方でそれらを織り込んだものを最終的な案としてみなさんに送らせていただき、最終調整して、策定という運びをつくりたいと思います。また最終的な御確認等をいただきながら、今年度作成を目標にやっていきますので、よろしくをお願いします。

(山田知事)
あとは一任しますけれど。

(森下文化スポーツ部長)
また、数日中に調整します。

(上原委員)
知事が来られる前にも、最後の文言に関して教育委員の中でいろいろ意見が出ました。

(森下文化スポーツ部長)
事務局としては、子どもを取り巻くいろいろな状況は日々変わっていますし、非常に変化が激しいということで、とりあえずの時点としては大綱を定めましたが、やはり状況に応じて柔軟に対応できるものにしたいと思っております。今後とも議論を深めていただきたいと思いますので、よろしくをお願いします。

(山田知事)

やはり地域全体でというのが大切だと思うのですけれども。

しかし15歳の女の子が2年間も監禁されていて誰も気付かないという。しかも真面目に大学に通っていた。

(畑委員)

でも、あの子が自分の身分を明かすために学生証を大事に隠していたというのは、本当にまさに「生きる力」だなと、家庭教育だなと思って。

(山田知事)

でも、やっぱりよっぽど怖かったのか、マインドコントロールなのでしょうね。

(畑委員)

でも、コントロールされずに生還したわけですから、本当にその生い立ちなのだろうなと思うのですけれども。

(上原委員)

最近、固定電話を置いていない家が増えてきて、子どもが自分の家の電話番号を知らないとか。

(山田知事)

大人も自分の家の電話番号がわからなくなる。

(畑委員)

携帯電話が覚えていますからね。

(上原委員)

全てメモリーの中に入っているようになってしまって、これまでは自分の家の電話番号をきちんと覚えていたけれど、これからの子どもたちにそれが果たして通じるかどうか。

(山田知事)

でも、逆に、インターネットを通じて両親が活動をしているのを見て励まされたという点もあります。ITについて学校で禁止をしているところもある。しかし、使わないと生活できない。では、そのバランスをどうとるのか。許可されていない情報が流れ込んでくるところから、どうやって子どもたちを守るのか。これらの問題はこの大綱には書き切れないのですが、知事部局と教育委員会とが力を合わせて、環境を守るという点では重要ではないかと思えますね。

特に今回は、児童虐待を中心に、地域全体で子どもを見守るという動きが出てきています。だから、学校もチームでいく、地域もチームでいく、そういう社会をつくるということをやぜひとも前段のところですっかり強調していただければありがたいなと思えます。

(小田垣教育長)

児童虐待の定義自体が時代に合わせてどんどん変わってきていますので。例えば、父親が母親に暴力を振るうのは、子どもが学校に相談すれば、まさに虐待を指すことになり、そのときに学校が児童相談所に通告するなど、法律では一定の手段が書いてあります。だからオール京都というよりは、学校がとるべき連携をある程度きちんと書き込んでおく必要があると思います。

(山田知事)

世の中、本当に新しい問題がどんどん出てきますのでね。

(畑委員)

大津の事件があつて、本当にここ2か月ほどまでは虐待という言葉が全く聞かなくなりましたね。いじめ一辺倒で。いじめが少し落ち着いたら、今度は虐待がまた急に出てきましたけども。だからマスコミの風評みたいなものに流されずに、やはりきちんと日常全体を見ていないといけないと思いますね。

(山田知事)

世界はあまりいい方向に向かっていないような気がします。とにかくこのごろテレビを見て、いつも感じるのは、写真の顔が全てぼかしでしょう。昔だったら写真を撮ってもそこで消えていくのに、インターネット時代は写真が残ってしまうから使えないのですよね。

(畑委員)

写真とインターネットの話ですけど、今までは店舗に来られたお客さんに「写真を撮らないでください」と制約していたのが、今は「撮ってください」です。それも「これを撮ってください」、バックもきちんとし、「ぜひここで記念写真をお撮りください」。積極的に写真を撮ってもらって拡散してもらうのが当たり前になっています。百貨店なども全部そう。そのために何を撮らせるかまで考えて操作するのです。だからインターネットと写真の関係もぐっと考え方が変わると。

(山田知事)

逆に、幼稚園の案内は子どもの顔を入れないのでしょ。

(上原委員)

いや、保護者の承諾書をいただいています。承諾がなければ入れない。インターネット、ホームページは全部そうです。承諾書を受けてからでないと載せない。

(上原委員)

4月当初、全員に承諾書をいただいて。中には「だめ」と言う人もいます。

(安藤委員)

人によって公開するのですか。

(上原委員)

いや、写真を選ぶ時にその子の入っている写真を選ばないということです。

(山田知事)

そうすると、その子は「私だけ何で入っていないの」みたいな。

(上原委員)

そうなのです。最終的に写真販売もするのですが、その子の写真はどうしても少ないのですよ。カメラが避けて撮ってしまうから。

中にはやはり難しい事情の御家庭がありますので。

(山田知事)

そういう事情の中で、どういうふうにやっていくのかは難しいな。

(畑委員)

本当にそうです。特殊な事情のために、他のみんながそのルールに甘んじなければいけないという、本当におかしな社会で、難しい。

(山田知事)

話はがらっと変わりますけれども、教育方針としては、やはり映画の「ビリギャル」などを見ていると、褒めて褒めて褒めちぎるじゃないですか。「ビリギャル」を御覧になっていませんか。

教育委員会はぜひとも1回見てもらいたいというか、学校の先生にも見てもらいたい。

(小田垣教育長)

日常的にそういう経験をしていますので。偏差値というのは入学した段階で。

(山田知事)

いや、そうではなくて、とにかく徹底して褒めるということ。褒めるだけみたいな、京都府の教育も褒めるだけにすると、やはりまずいですかね。

(上原委員)

今、褒めるのはよくないという逆説的な本も出ています。今は、褒め過ぎて、おだて過ぎて、結局しつけができなかったりとか、もう何でもオーケーみたいな風潮があると思うのですね。

(山田知事)

教育委員会としてはどういう方針なのでしょう。

(橋本教育次長)

それは、褒めるべき時にきっちりと褒める。そこを間違ったらあかんと思うのです。

(畑委員)

それこそ、一人ひとりに。

(上原委員)

今の若いお母さんたちは「褒めて育てる」がかなり常識になっているので、それはいいのですが、本来ここは注意すべきところも注意しなかったりするのです。

だから、多分電車の中で走り回っていても怒らない。

(山田知事)

いやあ、私は今年から部下を徹底的に褒めようと思って。やめるかな。あまり褒め過ぎるとだめかな。

(上原委員)

褒めてあげてください。

(畑委員)

それは本当に一人ひとり、全部違うと思うな。

(山田知事)

そういう基準は何かないのですかね。

(平塚委員)

いや、あの本は極端だと思いますね。あれはやはり、まあある程度の。

(山田知事)

自信を失っている子に対しては褒めようということなんでしょうね。

度を外した子には、きちんとということでしょうかね。

(平塚委員)

そうです。だからゆとり教育の方が僕は問題があったかなと思いますね。今、ちょうどその世代が就職している時でしょう。我々のところも畑先生もそうですけど、もう本当に宿題や復習や予習が全然できないのです。もう平気で。

(畑委員)

「僕たちはゆとり教育の世代ですから」と自分たちで言うのです。びっくりします。

(上原委員)

そうです。その世代の方々が、今お母さん、お父さんになっているのです。

(山田知事)

幾つぐらいですか、ゆとり世代は。

(上原委員)

30前ですね。今の若いお父さん、お母さんがゆとり世代。それが子育てしているのですよ。

(畑委員)

「こんなん、知ってる？」と単語を出しても「僕はゆとり世代ですからわかりません」。それで仕事に。「おいおい」という話です。

(山田知事)

今、中教審に出席していると、ものすごく細かいところまで決めようとするんですね。「そんなことまで決めてどうするんですか」と言うのですが。ゆとりの反動が来ちゃったのかな。すごく細かいし、要するに日常生活の積み重ねですね。

この前の広島の話も、中1でやったことが中3まで尾を引いていて、結局推薦を受けられなかったと。大学受験する時に高校1年からずっと勉強しなければいけないではないですか。私は、高1～高2は運動部をやっていて、高3になってから必死にやったタイプなので、そんな形でいいのかなと思うのですけどね。日常的な勉強の態度や日常的な成績を見て、それによって大学の進学を決める高大接続システム改革というのが出ているのですけども。

(上原委員)

それはしんどいです。ずっといい子でないと。

(山田知事)

そうですね。これは最初の大綱だから、まず全体だと思えるのですけれども、ぜひとも次はもう少し、京都ならではの雰囲気を出したいですね。やはり子どもたちが自由に自分たちの才能を伸ばせるために、いい環境を徹底的につくるとというのが京都の教育であってほしいと思うのです。「こうあるべきだ」みたいな話はあまりしたくはない。

(畑委員)

話が変わりますが、せっきくの機会なので。高校生に選挙権が広がって、学校内での政治的な活動に対する考えが都道府県でばらばらですよ。ああいうのはこれからの日本社

会でどういうふうに理解していけばいいのでしょうか。

(山田知事)

授業は難しいと思います。

(上原委員)

授業は難しいですね。授業は難しいけれども、生活そのもの。

(山田知事)

まず、アクティブラーニング。今までの学校の先生は「これが正しいんだ」ということを教えるのが基本ではないですか。1 + 1 = 2 とか。でも政治にはこれが正しいという答えがないから、自分で考えて、自分でこれがいいんだという方向を見つけなければいけないのだよ、という教育でしょう。それは、多分、学校教育とは一番かけ離れた教育だという気がするのですけれども。

(畑委員)

変な言い方ですが、自分の高校時代の友達や、うちの高等学校でもそういうことが沢山あります。そういう家庭や地域社会が本当に考えないといけないことを学校だけの問題みたいに語られてしまうと到底・・・。

(山田知事)

だから、両方教えられるかということですよ。政治の世界は、○か×ではなく、一つの範囲の世界ですよ。今、範囲の中で右を選ぶか、左を選ぶか、というようなことを教えることができるのか。例えば防衛の問題も、安倍さんは別に戦争をしたがっているわけではなくて、あの人はあの人なりに日本を守りたがっている。逆に、民進党や共産党の皆さんもまた日本を守りたがっている。その理由はそれぞれこうで、あなたはどちらを支持するのか、という教え方ができるかどうかです。

(畑委員)

そうですね。これから本当にそういう落ち着いた話が必要だろうなと思いますね。

(山田知事)

そして、子どもたちはものすごく素直だから、私が大学で一言「こうだ」と言うと、あとで感想を見ると本当に刷り込まれたみたいに入ってしまうのですよ。それを見ると、逆に、教育って怖いなど。

(畑委員)

それだけに、非常に責任も重いし、短絡的な議論にならないようにしていかなければならない。

(山田知事)

だからやはり、これから高校生に選挙権が与えられると、まさに自分で理解をして、その中で解決していくことのできる能力がないと、投票する立場になるわけですから。

(畑委員)

変な話、自動車の免許証も、卒業するまでに取る者もいれば、取れない者もいるわけです。私は2月生まれだから取れませんでした。そんなことですら、やはり気持ちの上でいろいろな捉え方があって、例えばそれをどう指導するかという課題があるわけですね。自動車の免許ですらそうだったという自分たちの経験の上で、もっと真剣に考えないといけないところが非常に大きいです。制度がこうなったからこうだ、みたいな説明では許されない。

(山田知事)

人間というのは、戦前の軍国思想のようにきれいに刷り込まれてしまう。だから、教育はものすごく大切なものだけれども、そういう刷り込みの可能性があるのでよほど注意をしなければいけない。それだけに政治家は、教育委員会がどんな教育をつくられるのかについて言いづらいところなのですけどね。でも、どこかでその問題には触れていかなければいけない。それは大綱の1番で触れていかなければいけない。

(畑委員)

そうですね。今すぐの必要はないですけど、やはりディスカッションの一つの話題として今後取り上げていく必要があるなとすごく思います。

ところで、京都で4年間学生生活を送るわけですから、「桂離宮ぐらい行ったら」という呼び掛けを学生さんたちにきちんとしてあげることが大事だと思います。

(山田知事)

多分、今度の迎賓館の通年オープンで、桂離宮、修学院についてもかなりオープンにしようという形になってくると思います。今までとにかく「見せない」「守る」傾向が非常に強かったのが、それをオープンにして使っていこうではないかという雰囲気は今変わっています。その時に一番見せたいのは子どもたちにでしょう。京都の子どもたちが一番いいのは、そういうものが身近にあるということなので。

(畑委員)

桂離宮の近くの大学で授業をした時に、みんな四条河原町の方しか向いていないから、桂離宮は背中の方にあるので、近くにあっても、本当に話題にも出ない。

(冷泉委員)

それは、見せる方もかなり制限しているのですね。

(畑委員)

制限していても、私などは何度も行くわけですから。

(冷泉委員)

あれこそ京都の日本の宝ですよ。でも、何か隠しているのね、全く。本当はあれが世界文化遺産ですよ。

(山田知事)

冷泉家もオープンします。

(小田垣教育長)

府立高校で文化財保護教育をやっていきます。

(山田知事)

ああ、いいですね。

(小田垣教育長)

文化財の修復現場を実際に見学させて、うちの技師がすごいというようなことを実感してもらいます。徐々に全員にということで、来年また予算をお願いさせてもらって。

(山田知事)

デービッド・アトキンソンの本に書いてあったのも、「国宝・重文の割に府の指定文化財が少ないではないか」「その理由は、文化財が増えると文化財保護課が大変になるからではないか」と。そう言われては。確かにもっとたくさんあるだろうという感じはしますね。

文化財の掘り起こし運動でもやりましょうよ。

(冷泉委員)

それにはお金が絶対必要ですから、よろしく願いいたします。

(山田知事)

本当にそこをやらなければいけないですね。

(上原委員)

そういうものをきちんと調査をされれば、結構あると思います。

(山田知事)

審査をする人間が少な過ぎて間に合わないということではなかったですか。

(上原委員)

やはり保存修理などにお金がかかるので。

(冷泉委員)

国宝や重要文化財となると、国や府に、修理の責任があるのですよね。そのお金がないでしょう。あまりにも予算が少ないという感じで。

(山田知事)

多分、文化庁の移転をするという時に、文化庁の予算は1,000億円だけど、1,000億円では少ないですよ。

(冷泉委員)

少ないですね。

(山田知事)

やはり5,000億円ぐらいにしないと。

(冷泉委員)

諸外国に比べても、圧倒的にパーセンテージ的には少ないみたいですね。

(山田知事)

これだけ歴史のある国でね。どこの国にも負けないぐらい古い歴史があるのですからね。

(冷泉委員)

それをやはり全面的に日本としては出してほしいですね。

(山田知事)

それはちょっと、今回の文化庁移転を機に我々も運動していかなければいけないし、そのためにも京都府も頑張らないといけない。

(冷泉委員)

よろしくお願いします。

(森下文化スポーツ部長)

ありがとうございました。本日の会議はこのぐらいにさせていただきます。また来年度以降、教育、文化、さまざまな課題は尽きませんので、いろいろなテーマを設定しながら、来年度以降も会議を継続させていきたいと思っております。テーマ、また日程等につきましては事務局の方で整理をして、今後お知らせしたいと思っております。